



HOKKAIDO  
ARTS FOUNDATION

# 北の とびら

vol.117

平成31年3月

特集

地方のまちと

舞台芸術の新しいかたち

まち×ひと×ダンス

OrganWorks『語る町』

この人に注目

太田竜介

アートのチカラを考える

北海道農民管弦楽団

街歩きアート

ジャズへの

熱い思いを持ち続ける人たちが、  
まちの魅力をつくり出す

「根室市」

土田英生の

演劇的恋愛相談

表紙作家の紹介

葛西由香



由香



特集

# 地方のまちと 舞台芸術の新しいかたち

## まち×ひと×ダンス

### OrganWorks『語る町』

「地域の住民とアートを、どのように繋げるか」。

コンテンポラリーダンス作品『語る町』は、

まちに住んでいる人たちへの取材をベースに創られました。

住民が作品に参加するのではなく、アーティストがまちに参加する

「この土地で創り、この土地で上演する」作品づくり。

地域における新しい舞台芸術のスタイルを探る試みです。

太平洋に面する白老町は、人口約1万7000人の小さなまち。面積の大部分は森林です。この白老と、隣接する登別市の市街地との中間の山の中に、「飛生アートコミュニティ」（以下、飛生）があります。

飛生はさまざまなアーティストが集い活動している、共同アトリエ&コミュニティスペースです。森を活用しての地域の住民とアーティストが交流する様々な活動を行っており、特に年に一度の「飛生芸術祭」は、世界的な活躍をするアーティストの参加もあって、近年は1000人を集客するまでになりました。2018年は、その飛生芸術祭が10回を迎える節目の年でした。

「飛生の活動が町の人にも少しずつ関心を持ってもらえるようになったこともあり、10回目の試みの一つとして、町とアートを結びつける動きをつくりたいと考えました」。そう語るのは、飛生の中核メンバーの一人であり、プロデューサーとして活動する森嶋拓さんです。

「地域の人に関心を持ってもらえ

特集  
**地方のまちと  
 舞台芸術の新しいかたち**  
 まち×ひと×ダンス  
 OrganWorks『語る町』



**平原慎太郎** (ひらはらしんたろう)  
 1981年生まれ、北海道出身。ダンサー、振付、演劇のステージングなどを中心とし、大植真太郎、Carmen Werner、森山未來、コンドルズ、劇団イキウメ、小林賢太郎、白井晃などの作品に携わる。またダンスカンパニーOrganWorksを主宰し国内外で活動。塩田千春、播磨みどり等の現代美術家とも積極的に交流している。2011年韓国国際モダンダンスコンペティション最優秀振付家賞。2015年小樽市文化奨励賞。2016年トヨタコレオグラフィアワードにて次代を担う振付家賞、オーディエンス賞をW受賞。日本ダンスフォーラム賞受賞。  
 www.theorganworks.com



**森嶋拓** (もりしまたく)  
 プロデューサー。北海道コンテンツポラリーダンス普及委員会代表、CONTE-SAPPORO Dance Center代表。コンテンツポラリーダンスを中心とした定期的な公演や振付家養成のための講座等を実施。ダンサーのサポートやマネージメントも手掛ける。OrganWorksの広報担当。2017年からは「北海道国際舞踏フェスティバル」を実施するなど舞踏の普及にも力を入れている。



るような『まち』をテーマとした作品で、わかりやすい楽しさや感動ではなく、想像力を喚起するようなクリエイティブな舞台作品を創りたい。そう考えた森嶋さんは、東京を拠点に国内外で活躍している北海道出身のダンサー・振付家の平原慎太郎さんに創作を依頼しました。

「話を聞いて、ドキュメンタリーみたいな作品にしたいと考えました」と平原さんは言います。「今の時代、インターネットなどで白老や登別を調べることでも作品は創れます。でも、そうやってアーティストの中で創ったものをポンと出して観てもらおうのではなく、もっと新しいかたちでやりたいと思っただけです。まちに住んでいる方たちから生まれるもの、それを僕らの解釈で、住んでいる人たちに観せるために創りたい、東京で培った何かを表現するのではなく、声を聞いて何かを生みたい、目を見て何かを見せたい、と」。

平原さんは森嶋さんと一緒に、白老・登別で暮らす小学生から80代までの約30名に、「あなたが考えるこのまち」についてインタ

ー7月某日、約30人の登別・白老町の住人に話を聞きました。それぞれの年代、立場、環境は、それぞれの人間を組み立てている。そういう印象を受けました――

語り手の印象的な台詞から始まる『語る町』では、タイトル通り、住民役のダンサーたちが、言葉と身体でまちについて語ります。「どう感じるかは自由だけど、早口だったり、まちの距離感だったり、踊りがテキストのように見えたら嬉しい」と平原さんは言います。

ビュー。それぞれの人が思うまちの自然、特産物、家族、趣味、まちへの不満、東京への憧れ、まちの変化への期待などのモチーフをちりばめて約60分のダンス作品を創作し、2018年11月、自身が主宰するダンスユニットOrganWorksの作品として白老町内の多目的ホールで上演しました。



「取材させていただいた方たちからすると、他人の声や身体を借りて自分の語ったことを受け取るわけで、これはインタビュー映像を見るより客観視できる体験だと思います。『語る町』は僕らなりに、そこに行かなくては創れなかった作品。彼らに見てもらうことに意味がある、土地に返す、という気持ちです」。

プロデューサーの森嶋さんは「地方での新しい舞台芸術のかたちをつくっていくことに意義を感じている」と言います。「舞台芸術は劇場のある都会に住み、アートに関心のある人たちがいるもので、地方に住む人々にとっては縁が薄いもの、という現状があります。僕は劇場がない地方のまちでも、アートやダンスを切り口として新たな視点で人生を見つめる機会をつくっていききたい」。

日頃は首都圏で活動しているアーティストが、地方で生きる人々と接点を持ち、作品を創作する。都市の劇場で上演する作品とは違う新しいスタイルを創造する試みは、2019年も白老・登別の地で続きます。



## 北海道農民管弦楽団

a r t

### 農民オーケストラが奏でる、心豊かな暮らしのための音楽

「緻で大地を耕し、音楽で心を耕す」をモットーに、農業者や農業関係者で結成されたアマチュアオーケストラ、通称「農民オケ」。約70名のメンバーが年に一度、農閑期の冬に集まり、おもに農村地域で定期演奏会を開催しています。代表を務めるのは、余市町でブドウなどの果樹や野菜の有機栽培を手がける牧野時夫さんです。アマチュアながら経験豊富なヴァイオリニストであり、指揮も担当しています。

牧野さんは北海道大学交響楽団に所属していた学生時代に、童話作家・詩人であり農業指導者でもあった宮澤賢治の『農民芸術概論綱要』に出会いました。農と芸術が一体となった、人間らしく創造的な暮らしを实践する「農民芸術」の理念に大きく影響を受けた牧野さんは、大学卒業後、準備期間を経て30歳で就農。翌々年の1994年、仲間とともに、賢治が目指した「農民の、農民による、農民のためのオーケストラ」を設立したのです。

秋、北海道各地にいるメンバーの元に譜面が届き、仕事の合間を縫っての自主練習がスタート。11月以降に計10回程度の合同練習を行って、1月末または2月初旬に演奏会となります。全員が揃うのは演奏会前の特訓日のみですが、それぞれの熱心な練習を重ねるごとに技術レベ



結成25周年を迎えた今年は、2月3日に札幌コンサートホールKitaraで定期演奏会を開催

ルが上がり、今では札幌のアマチュアオーケストラに勝るとも劣らない演奏を披露しています。

2011年には、デンマークで初の海外公演を実現しました。デンマークは、技術的にも思想的にも北海道の農業と深いつながりのある地です。「神を愛し、人を愛し、土を愛す」という三愛主義に基づいた教育や農民主体の社会は賢治の思想とも通底しており、オーケストラにとって大きな意味を持つ旅となりました。

また、賢治の没後80年にあたる2013年には、賢治が生きた「聖地」岩手県花巻市で公演を果たし、岩手県民大学より第22回農民文化賞を受賞。2018年には花巻市より第28回イーハトーブ賞を受賞し、贈呈式では牧野さんが作曲した「イーハトーブ組曲」を東北農民管弦楽団とともに演奏しました。ほかにも数々の賞を受賞しており、農業者を主体とした質の高い演奏は、農民芸術の文化活動として道内外で評価されています。

「経済性だけを追求するのではなく、人間としての豊かな生き方を、農業をやりながらみんなで探していきたい。その方法として、音楽がある」と牧野さん。今後も賢治の精神を受け継ぎ、農民ならではの芸術を追求・実践していきます。

## 平成30年度 アート選奨（アート選奨K基金事業）

北海道文化財団では磯田憲一氏からの指定寄附を基に、アート選奨K基金を創設。当財団が主催・共催・支援する芸術文化活動などの中で特筆すべき活動を行い、本道の芸術文化の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人・団体にアート選奨を贈呈しています。平成30年度の受賞者は、富良野演劇工場の太田竜介さんに決定しました。

この人に注目!



### 太田 竜介さん

富良野演劇工場工場長  
NPO法人ふらの演劇工房事務局長

富良野演劇工場（以下、演劇工場）は、演劇を核としたまちづくりの拠点として2000年に誕生した公設民営劇場です。

工場長の太田竜介さんは岡山県出身で、富良野塾（倉本聰さん主宰、1984年～2010年）の十期生。卒業後は東京での演劇活動に力を入れていましたが、演劇工場設立時に再び富良野に戻り、演劇工場を管理・運営するNPO法人ふらの演劇工房に就職。以降、富良野塾の公演のサポートと演劇工場の企画・運営を中心に、近隣市町村へのアウトリーチ公演や富良野市民劇団「へそ家族」の脚本と演出などを手掛けてきました。富良野塾OBユニットの公演にも携わっており、2019年1月には太田さん自らが作・演出を手掛けた『みずのかげら』を札幌で上演し、好評を博しました。

また、演劇の手法を取り入れた「表現とコミュニケーション」のワークショップも独自に開発・実施しており、

富良野市内の全小中学校のカリキュラムに採用されているほか、高校や専門学校、企業の研修としても活用されています。

さらに近年は市の観光課と連携して、富良野塾OBユニットの俳優がバスガイドに扮してまちを巡るなど、演劇仕立ての観光ツアーを企画・実施。「こういった取り組みを、いずれ地域の人が主体でできるようになれば」と太田さんは考えています。

太田さんの夢は『富良野で毎年、1カ月間以上の演劇フェスティバルを開催する』というもの。「演劇工場では昼と夜とで異なる作品を、毎日上演する。観客は富良野に宿泊し、滞在中は風景や料理も楽しむ。そうやって、演劇を中心に地域ぐるみで盛り上げていきたいですね」。

演劇のまち・富良野から演劇文化を発信する太田さんの今後の活躍に期待が寄せられています。

最東端の実力派ビッグバンド

## イースト・ポイント・ジャズ・オーケストラ (EPJO)

デューク・エリントンやカウント・ベイシーなど、ビッグバンドの楽曲を中心に演奏している「イースト・ポイント・ジャズ・オーケストラ (EPJO)」。「ネムロ・ホット・ジャズクラブがあるので、生でジャズを聴く機会が増え、1981年に『ジャズやるべ』と、市民吹奏楽団のメンバーを中心に始まりました」と、アルトサックス担当の野田敏さん。結成時からのメンバーであり、現在コンサートマスターを務めています。

一時、休眠状態だったこともありましたが、1996年に復活。道東地域や札幌、道外のほか海外遠征もこなし、サハリンや北方四島でも演奏を行いました。選抜メンバーがコンボ(少人数の形式)で「サッポロ・シティ・ジャズ」に出演するなど、EPJOはプロのミュージシャンも認める実力を備えています。

2015年には、根室をテーマとしたオリジナルアルバムをメジャーレーベルからリリース。日野元彦さんの「流氷」はもちろん、今やEPJOのテーマ曲となった、トロンボーン奏者・向井滋春さん作曲の「ニムオロ・ネイナ(ネムロの歌)」などが収録されています。「アレンジもプロデューサーも根室出身の“オールネムロ”で制作しました。有名なミュージシャンの曲をカバーするだけでなく、根室で演奏活動する意味を大事にしたかった。コンサートでも根室ゆかりの曲は必ず演奏しています」と野田さんは言います。

このたび2018年度北海道地域文化選奨を受賞し、ますます活躍が期待されるEPJO。唯一無二の、最東端のビッグバンドに要注目です。



コンサートマスターの野田さん。「バンドでは一番のビッグバンド・フリークだと自負しています!」



EPJO『The Jazz Songs for Nemuro』。根室出身の作曲家・編曲家の飛澤宏元さんが、ビッグバンド用にアレンジした曲やオリジナル曲を収録



毎年2月か3月に定期コンサートを開催。2019年もアルバムにも参加の女性ジャズドラマー・川口千里さんをゲストに迎え3月10日に行われた

●<https://www.facebook.com/EastPointJazzOrchestra/> (フェイスブック)

## Column

### 最東端の地から発信するアート 落石計画

1908年(明治41年)、北太平洋を行く船舶や航空機との交信施設として落石岬に設置された「旧落石無線送信局」の遺構を会場に、2008年から始まったアートプロジェクト。現在、この建物は根室出身の版画家・池田良二さんがスタジオとして使用しており、夏の数日間のみ、アートの空間として公開されます。

プロジェクトの中心になっているのは、版画家の井出創太郎さんと高浜利也さんのユニット。それぞれが教鞭をとる愛知県立芸術大学と武蔵野美術大学の学生・卒業生らも運営に関わり、作品の制作・展示と、子どもたちへのワークショップを実施しています。

プロジェクトの目的は、かつて世界とつながっていた国内最東端の無線局という空間から、アートを発信しようというもの。また、歴史的遺構を活用することで保存へつな



美大生や若手作家の指導のもと、落石をイメージした絵をTシャツと横断幕にシルクスクリーンでプリントするワークショップが行われた(第11期)

げ、アートを通じて市民が地域の価値を再認識するきっかけにもなっています。

2019年の第12期は、第1期から関わってきた若手版画家の阿部大介さんと鷹野健さんのユニットがプロジェクトの中心になる予定。どのような空間が現れるのか期待が高まります。

●旧落石無線送信局(現 池田良二スタジオ) 根室市落石西244-4 ※「落石計画」は毎年8月7日~11日に開催  
<http://www.ochiishikeikaku.com> (落石計画HP)

## ジャズへの熱い思いを持ち続ける人たちが、まちの魅力をつくり出す



### 【根室市】

北海道最東端のまち・根室市は、納沙布岬から北側にオホーツク海、南側に太平洋を抱く根室半島に位置します。道内有数の漁業のまちとして知られると同時に、「ジャズのまち」とも言われ、プロのミュージシャンが市民と深く関わってきました。近年は、歴史的遺構を活用したアートプロジェクトが行われるなど、美術の分野でも新しい活動が始まっています。

### 「ジャズのまち」の原点 **ネムロ・ホット・ジャズクラブ**

レコード鑑賞会や新譜の批評会などを行う「ネムロ・ホット・ジャズクラブ」。空前のジャズ・ブームだった1960年代後半に市内のジャズファンによって結成され、2019年1月に創立54年を迎えました。「蕎麦屋の出前持ちも、アート・プレーキーの『モーニン』を口ずさんでいた時代だったね」と話すのは、創立時からのメンバーの谷内田(やちだ)一哉さん。ジャズクラブの拠点として1978年にオープンしたジャズ喫茶「サテンドール」の元マスターで、2018年に店を人に譲ったあとも、例会には欠かさず参加しています。

「閉店時間のあとも、マスターの家に上がりこんでジャズ談義したっけ」と懐かしむのは、現会長の中谷(なかに)孝二さんです。中谷さんは高校生のころ初めて見たライブ演奏に衝撃を受けて以来、ジャズのとりこに。ジャズクラブの活動は、会員のジャズ雑誌への投稿をきっかけにミュージシャンに知られ、ベース奏者の鈴木勲さん、トランペット奏者の日野皓正さんなど名だたるミュージシャンが根室を訪れるようになりました。ドラム奏者・日野元

彦さんの「流氷」など、根室がモチーフの曲も多数誕生しています。

時代とともにジャズ熱は息をひそめましたが、月2回の例会は1150回を超え、年に1回はミュージシャンを招へいし続けています。こうした功績が認められ、ネムロ・ホット・ジャズクラブは2009年度北海道地域文化選奨特別賞を受賞。2015年には根室市文化賞を受賞しました。谷内田さんの「サテンドール」は、東京から移住した棚網(たなあみ)宏さん・享子さん夫妻が引き継ぎリニューアル・オープン。ハンドリップのコーヒーとともに、こだわりのオーディオで名盤を聴かせてくれます。そして今もジャズクラブの例会の会場です。「ジャズは一生付き合える音楽」と中谷さん。ジャズへの扉は、いつも開かれています。



元「サテンドール」店主の谷内田さん。「根室の人はミュージシャンを大事にしたし、オーディエンスとしての質も高い。根室のまちはジャズメンに愛されてきたんです」



漁師の「船長」こと中谷さん。「昼に真空管のアンプのスイッチを入れておいて、夕方漁から帰ったら1枚聴くのが日課。最近では昔のブルーノートのリー・モーガンなんかを聴いてるね」



サテンドールでは、マッキントッシュの真空管アンプで店内にあるレコードを堪能できる

●ネムロ・ホット・ジャズクラブ <http://www.14.plala.or.jp/hot-jazz/>  
●喫茶 サテンドール 根室市大正町1-24 営業時間:9:00~18:00 定休日:木曜 電話070-4816-1538 <https://satin-doll.com>



表紙作家の紹介



ひつじ雲

葛西 由香 画家

Yuka KASAI

1993年網走市出身。2016年札幌大谷大学芸術学部美術学科日本画専攻卒業。

日本画の伝統的な表現技法「見立て」などを使い、頭の中で起こるもう一つの日常を描く。

札幌を拠点に活動中。

- |                                    |  |
|------------------------------------|--|
| [個展]                               | 2015年 「朋翼会展」(大同ギャラリー／札幌)               |
| 2018年 「日々とあそび」(クラークギャラリー+SHIFT／札幌) | 「90周年記念道展」(札幌市民ギャラリー)                  |
|                                    | 2013年 「道展U21」(札幌市民ギャラリー)               |
| [グループ展]                            |  |
| 2017年 「アートフェア札幌2017」(クロスホテル札幌)     | [受賞]                                   |
| 2016年 開廊5周年記念「超日本」展                | 2016年 「札幌大谷大学卒業制作展」芸術優秀賞               |
| (クラークギャラリー+SHIFT／札幌)               | 2015年 「90周年記念道展」入選                     |
| 「2020—来るべき者達」(クロスホテル札幌)            | 2013年 「道展U21」中里賞                       |
| 「アートフェア札幌2016」特別展示(クロスホテル札幌)       |  |
| 「500m美術館 vol.19 いつかきたみち、こどもみち」     | [販売・イベント]                              |
| (札幌大通地下ギャラリー500m美術館)               | 2018年 「大きな谷のクラフトワーク展」(さいとうギャラリー／札幌)    |
| 「札幌大谷大学卒業制作展」(札幌市民ギャラリー)           | 2017年 「大きな谷のクラフトワーク展」(さいとうギャラリー／札幌)    |
| 「朋翼会展」(大同ギャラリー・道銀ギャラリー／札幌)         | 2015年 「very merry show!!!」(札幌駅前地下歩行空間) |
| 「二人展」(コーヒースタンド28／札幌)               |  |

◎北海道文化財団アートスペース企画展 vol.39

葛西由香展「201号室、傍らの些事」

会期：2019年3月18日(月)～6月28日(金) 9:00～17:00

休館日：土・日・祝日

※都合により臨時休館する場合があります。

会場：北海道文化財団アートスペース  
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)

入場料：無料



紐に小蠅図



吐息

土田英生の演劇的恋愛相談

③

八相談

朝昼は肉体労働、夜は飲食店で働き、空いた時間は演劇の創作活動や観劇にあてています。お金がなく、半分劇団の倉庫になっている安アパートで暮らしている状況です。  
猪突猛進な性格で、器用に物事をこなせるタイプではありません。以前付き合った女性とは、創作に没頭し過ぎて悩みを聞いてあげられなかったことが原因で別れました。  
このまま一人、減じるしかないのでしょうか？  
何が足りないのか、ご教授頂けると幸いです。

相談者・竹原圭一 (RED KING CRAB代表)  
2013年にRED KING CRABを結成。脚本・演出・役者を担当。第2回公演『おだぶつ』で札幌劇場祭「GR2014」新人賞受賞。2015年、遊戯祭企画展作品『あすなろ』が最優秀賞受賞。同年、第3回公演『[baka]』で札幌劇場祭「GR2015」審査員特別賞受賞。2018年、特別公演『ガラスの動物園 The Glass Menagerie』にて札幌劇場祭「GR2018」審査員賞、団員の木山正大が俳優賞を受賞。

八回答

これは演劇活動や金銭の問題とは関係がないと思いますよ。創作に没頭し過ぎてというのは言い訳に過ぎません。答えは竹原さんの中で出ているのではないのでしょうか？  
恋愛で他人同士が一緒にいるためにはギブアンドテイクが必要になります。自分を理解してくれる人にそばにいて欲しい。それは相手も同じことです。  
カラオケでもそうですよね。自分の歌を聞いて欲しければ、相手の歌も聞く。ですから、まずは相手に興味を持つことがとても大切だと思います。

回答者・土田英生 (劇作家・演出家／MONO代表)  
1989年に「B級ブラックティス」(現MONO)結成、1990年以降全作品の作・演出を担当。1999年『その鉄塔に男たちははいるという』で第6回OMS戯曲賞大賞を受賞。2001年文学座に書きおろした『崩れた石垣』のぼる鮎たちで第56回芸術祭賞優秀賞を受賞。2003年文化庁の新進芸術家留学制度で1年間ロンドンに留学。テレビドラマ・映画脚本の執筆も多数。

こぐま基金事業

◎希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」

全国に門戸を開き、次代を担う優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合うことで、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的に設立された北海道戯曲賞。今年度は応募総数120本の中から、大賞に『バージン・ブルース』(大池容子 作)、優秀賞に『酒乱お雪』(伸由樹生 作)と『転職生』(本橋龍 作)が選ばれました。

大賞 (賞金50万円/記念楯)

『バージン・ブルース』 大池 容子さん (東京都/劇作家・演出家・うさぎストライプ主宰・アトリエ春風舎芸術監督)

1986年大阪府出身。日本大学芸術学部演劇学科劇作コース卒業。2010年、劇団青年団演出部に入団。同年、うさぎストライプを結成し、現在までに23作品を発表。その全ての公演で作・演出を担当する。「どうせ死ぬのに」をテーマに、演劇の嘘を使って死と日常を地続きに描く作風が特徴。2013年9月、芸劇eyes番外編・第2弾「God save the Queen」に参加し、地下鉄サリン事件を遠景に交差する人々の思いを描いた『メトロ』を上演。2013年12月、アトリエ春風舎の芸術監督に就任。

優秀賞 (賞金5万円/記念楯)

『酒乱お雪』 伸由樹生さん (神奈川県)

1999年福島県出身。文学部在学。月蝕歌劇団、新宿梁山泊に出入りし戯曲を書くに至る。

『転職生』 本橋 龍さん (東京都/劇作家・演出家・ウングツィーフア主宰)

1990年埼玉県出身。高校の頃、銀杏BOYZを聞いた瞬間から「自分は何かを成し遂げられる」と信じて疑わない。同時期に部活にて演劇を始め、唯一自分ができることと判断し現在まで続ける。2009年、尚美学園大学に入学。若林一男教授の下演劇を学ぶ。2013年に大学を中退。実家から家出し、そこから自身の創作ユニット「栗☆兎ズ」で劇作活動を本格的に始める。2016年、江古田に居住し活動の拠点である「栗☆兎ズ荘」(木造二階建ての一軒家。後のウングツィーフア)を構える。2017年、ユニット名を「ウングツィーフア」に改名。改名後最初の公演「動く物」の戯曲が平成29年度北海道戯曲賞にて大賞を受賞。

人づくり一本木基金 (長原實・スチウレ・エング 人づくり基金)

◎ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住または道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な方々に、「ものづくり一本木選奨」を贈呈しました。

長原 實

(賞金50万円/記念楯)

服部 勇二さん

(東川町/木工家具職人、家具工房「木魂」主宰)

㈱カンディハウスの設立当初のメンバーとして製造現場を担い、同社の職人技術継承事業「旭川工房 一本技」を発展、推進した。独立後、多くの手作り家具を生み出し、「君の椅子プロジェクト」のつくり手にも従事している。国際家具デザインフェア(IFDA)では審査作品の試作協力メーカーにおけるオブザーバー、旭川市工芸センターの「椅子製作の技能研修会」では講師を務めるなど、次代を担う職人の育成や新たな技術、技能の開発に力を注いでいる。

奨励賞

(賞金10万円/記念楯)

(五十音順)

佐藤 佳樹さん

(帯広市/建具工、(有)高橋加工部)

- ・平成29年第55回技能五輪全国大会家具部門に出場し、敢闘賞受章。
- ・平成30年第56回技能五輪全国大会建具部門に出場し、金賞受章。

馬場 雅己さん

(小樽市/硝子工芸作家、創造硝子工房studio J-45合同会社代表)

- ・2005年以降、全道展で奨励賞、佳作、北海道新聞社賞、会友賞を受賞し、現在、全道展工芸会員。
- ・2017年市立小樽美術館の企画展出品作家の一人に選出。
- ・台湾との文化交流など作品を通じた国際交流、工房での親善活動にあたりながら、「硝子の街」小樽生まれの数少ない硝子工芸作家として活躍。

吉澤 俊輔さん

(島牧村/木工職人・作家、吉澤俊輔家具工房主宰)

- ・平成16年第17回北の生活産業展デザインコンペティション入選。
- ・平成16年暮らしの中の木の椅子展入選。
- ・島牧村唯一の家具工房を構え、島牧の自然、風土に根ざしたライフスタイルを行いながら創作活動、街づくり活動を実践。